



## 子どもの研究と理解について

### 考えること

山下俊郎

☆ ☆ ☆

現代の乳幼児研究における最高峰をしめる学者としてわたくし達はアメリカのアーノルド・ゲゼル博士を挙げることができる。

昨年、博士の三部作が邦訳されることになり、そのうちの乳幼児の心理学(原著名は生後五年間 The First Five Years)をわたくしの手で訳して刊行した。このことが機縁になつて、アメリカ大使館でゲゼル博士の業績を映画にした

「赤ちゃんと子ども」[Life with Babies]

という二巻物の映画の日本版を作るといふので、その訳語の相談をもちかけられ、この映画を試写してもらつてみる機会が与えられた。ゲゼル博士の研究の状況、まだ学生に対する講義、教師に対する講義、母親教育の状況、博士の臨床診断と指導の実際の模様が、映画に映し出されてひじょうに興味深くみることができた。

この映画をみてわたくしの感じたことは、研究と教育のための設備、ことに映画を利用していること、まことにうらやましく感じられた。ほとんどこうに足りない設備と零に近い研究費で、苦しみながら、一向に研究の進まないわたくし達にくらべて、実にめざましいものである。

☆ ☆ ☆

ゲゼル博士は乳幼児研究にたずさわることすでに四十年、すでに七十三才になられるはずであるが、研究の設備と研究費の豊かさ、さらに博士と研究をともにしている研究者の多数がみごとなチーム・ワークのもとに研究をすすめていることはまことにうらやましい限りである。日本にもこういつたためぐまれた研究の環境がほし

い。そうなつたら日本の子どものしあわせがどれだけ進むことだろう。

なお、ゲゼル博士は、わたくしの訳書に日本の読者のために日本版への序文を下さつたが、その中で、博士の書を読むのに、日・米という相異なる文化の中に成長している子ども達の類似性と差異性という二つの点にとくに留意するようにとの注意をして下さつた。

このことは、終戦後に入つてきたアメリカのいろいろな学説を理解しこれを日本の子どもにも適用しようとする場合に、よくよく考えなければならぬことである。

子どもの生活している社会、そしてそこに流れている文化によつて、子どもの性格形成はいちじるしく影響される。このことは一応誰でも認めていることなのに、いざ現実のこともにあてはめるときに、まるで盲目的に、  
歐洲やアメリカの文化とのつながりにおいてはじめて考えられるようなことを、そのまま日本の子どもにあてはめようとする人々がいることはなげかわしい。このことをわたくし達は精神分析理論の日本の子どもへの盲目的な適用に見ることができる。

☆ ☆ ☆

斎藤文雄博士は、二月号のヌースにひとりひとりの子どもということ強調しておられるが、日本の子どもも育つている社会、ことに家庭生活の特異性というものを理解した上で、子どもを理解し、育てることはひとりひとりの子どもの理解と同じように大切なことである。

